

『登校ファイター』 - 月夜飛鳥

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

鳥のさえずりは優しく、カーテンの隙間から差し込む光は優しい。

穏やかな春の朝だった。

寒さも弱まり、めっきりすごし易い日々が続いている。ぬくぬくと布団にくるまる朝のひとつき。

心地よい。

目は覚めていた。しかし、まだ俺は起き上がる気はなかった。

二度寝は人生最高の楽しみだ。だから遅刻寸前ぎりぎりの時刻まで寝ている。それが俺のポリシーだった。

「しょーくん、起きないと遅刻しちゃうよ」

穏やかな声が聞こえる。至高の一時を邪魔する無粋な声。同時に俺の体が軽く揺すられる。

「ん……」

かすかに目を開くと、見慣れた自分の部屋と見慣れた顔があった。

「あ、起きた」

見慣れた顔は俺が目を開けたのを確認すると薄く微笑んだ。穏やかな微笑みだった。誰もが美少女と評価するだろう、恵まれた顔立ちに、男なら魅了されざるを得ないそんな表情を浮かべている。

「もう八時十分だよ……急がないと」

やはり穏やかな、母親が赤ん坊に対して使う言葉のように優しく告げた。

「あ、あー」

遅刻しそうになる俺を隣家に住む幼馴染の加藤明が起こしに来る。我が家ではしばしばある光景だった。昔は俺が起こしに行くことが多かったのだが、最近は起こされるほうが多い。理由は……。

……………。

ちょっと待て、八時十分だと。

ガバ！

俺は慌てて飛び起きた。

八時十分。それはデッドライン。今から急いで登校しても間に合うかどうかはぎりぎりという時間だった。

枕元にある目覚まし時計を引っ掴んで時間を確認する。たしかに八時十分だった。そして、目覚ましのタイマーは何故か止まっていた。おまけに昨夜八時に合わせたはずなのに、現在セットされた時刻は十二時だった。

ベッドから飛び降りる。刹那の瞬間も無駄にしない。努力と一パーセントの才能で鍛えた早業で制服に着替える。

「ちょ、ちょっとお。私がいるのにいきなり着替えしないでよ」

困ったような声をあげ、あまつさえ頬など赤らめて後ろを向く。長い髪が遅れてふわりと舞った。今日は一切髪を束ねておらず腰まで届く髪を自然にまかせている。

「おまえなあ……」

ズボンに足を通しながら、俺は多少押し殺した声で言った。まったくもってふざけたやつだ。

「また勝手に目覚まし止めただろ。おまけに時間まで変えやがって」

そうなのだ、この明という野郎は、俺を起こしに来たい、というわけの分からない理由だけで人の部屋に深夜侵入し、目覚ましの設定を変える。

「おかげで遅刻しそうじゃないか！」

着慣れたブレザーに袖を通しながら絶叫する。ちなみにすでに着替えは完了だ。我ながら脅威のスピードだと思う。

「大丈夫だよ。しょーくんの自転車なら八時二十分までに出れば間に合うから。もち

ろんこれは私を後ろに乗せる場合の計算だよ」

振り返った明が胸を張って言う。平均的な高校生よりかなり大きい胸がその格好のせいでより強調された。たぶん、わざと胸が強調されるようにやっているのだろう。「あいにくと自転車は、こないだダンプに撥ねられご臨終だ。あと、自転車が無事でもお前を後ろにのせて走るつもりはない。気色悪いだろ」

薄っぺらなカバンを掴む。カバンは中身をほとんど学校に保管し、軽量化されている。

遅刻寸前でも十分なスピードが出るようにとの配慮だ。

「ひどおい。毎朝起こしにくる可愛い幼馴染に向かってそんなセリフはないんじゃない」

「毎朝じゃねえだろ、だいたい遅刻しそうなのはお前に目覚ましを止められたからだ。だいたい……」

半ば駆け出すように部屋を飛び出る。たしかに自転車なら余裕の時間だが、歩き……いや走りの場合、本当に厳しい時間だった。

俺を追いかけるように明も出てくる。何となく慚然とした様子が背中越しにも伝わってくる。

「俺は男を後ろに乗せて走る趣味はないんだよ」

そう、『かとうあきら』十七歳。俺の幼馴染は、美少女の顔した正真正銘男だった。

「しょーくん、待ってよお」

家を飛び出て、わずか二百メートルほどで、後ろから情けない声が聞こえた。走りながら振り返ると息を切らせながら懸命に走っている女の子の姿が見えた。女子の制服に身を包み、顔立ちまでも美少女のオカマは体力も女子並みだった。いや、女子以下か……。

「知らん。ついてこれないのなら置いてください」

冷たく言い放つが、問題ない。相手は明だ。それに現在危機的状況にあるのは大部分があいつのせいだから。

「そんなあ……」

がくり、と膝をついて倒れる。声がだんだん離れていく。体力の限界がきたようだ。あいつは遅刻決定だな。最初から自転車の荷台をあてにしていたらしい。

脱落した弱者から目を離し、俺は目指すべき前を見据える。

俺の通う高校が見えた。ただし、距離がまだかなりある。さらに坂を上り、下り、そしてもう一度坂を上ることようやく到着することができるのだ。曲がり道のほとんどないまっすぐな道。ある意味これは陸上競技に近いかもしれない。

学内でも有数の健脚でもって俺は一つ目の坂を一気に駆け上がる。そうしたほうがかえて体力の消費が少ないことを俺は経験から知っていた。

坂を上りきると、頂上付近に喫茶店があるのが分かる。特に洒落ているということもないごく普通の喫茶店だ。俺はたまに学校帰りによる程度しか利用しない。もっぱら坂を上りきったという目安として使っていた。

いわば第一のチェックポイントだ。

ちょうど、第一チェックポイント『喫茶店』の横を通り過ぎようとした時だった。

(！ 殺気！)

奇妙な感覚だった。うなじのあたりがぴりぴりする、とでも表現すればいいのだろうか。

瞬間、俺はアスファルトに転がり込むように跳んでいた。カラン。乾いた音がした。

ちょうど俺が殺気を感じた地点だ。見ると地面に手裏剣が落ちていた。

手裏剣だぞ。忍者が使う、あの。

「ちっ！」

憎々しげな舌打ちが聞こえた。それは『喫茶店』のほうからだ。

「……あー、忍か」

どうして今まで気づかなかったのだろうか。自分の間抜けさにあきれてしまう。

『喫茶店』の前にあった看板。その影に隠れるようにして一人の少女がいた。

「よく気づいたわね」

少女は低い声で言った。看板の陰から立ち上がり、姿をさらす。といっても、新たに現れたのは目のつり上がった気の強そうな顔だけだった。首からは最初から見えていた。

隠れるようにであって、隠れていたわけではないのだ。頭隠して尻隠さず。というか、頭しか隠してない。

「ほんものの馬鹿だろ？ お前」

俺はそう言わずにはいられなかった。

「な、なんだとー」

激昂した少女が叫ぶ。何だか頭が痛くなりそうだ。

忍野忍。俺のクラスメートで、同じ遅刻仲間だ。

「じゃあ、ほんもののアホ」

「同じだ！」

再び忍が叫ぶ。……馬鹿だのアホだの言われただけでここまで怒れるとは、異常に導火線の短いやつだ。

「何でもいいが、遅刻しそうなんだ。登校の邪魔するな。お前だつてやばいだろ」

もう始業まで時間がない。こんな所で足止めされている暇はないのだ。

「行かせない」

俺の言葉に対して、忍はそう返してきた。

何言ってるんだ？ 行かせないって。俺を足止めしてどうするんだ。

「は？」

「遅刻しなさい」

「なんでだよ！」

「去年、あんたと明のせいで、私が何回遅刻したと思うの！ どれだけ説教を受けたと思ってるの！ これは私のあなた達に対する、復讐よ」

つまり、何だ。こいつにとって俺を遅刻させることが復讐なのか。

とんでもないやつだ。もう少し有意義な復讐もあるだろうに。

それに、俺たちのせいっていつだ？ ひょっとして登校途中自転車で撥ねた時か？ いや、登校の邪魔するから、殴り倒した時か。……あー、考えると結構ありそうだなあ。

「安心しなさい。一時間目までには間に合うようにしてあげるから。……授業さぼると私もやばいし……」

忍は制服のポケットから手裏剣を取り出して構える。本気だよ、この女。

「ハア！」

手裏剣が鋭い回転を与えられ飛翔する。狙いは俺の足元。跳び上がることで俺は何か回避する。

「あ、あぶないだろ！」

「急所は狙わないし、手加減するから大丈夫よ。あんたなら避けられるって。私に背を向けて登校しないかぎり」

忍のいうことも本気で、手裏剣は避けられないこともないのだが、避けながらの登校は無理そうだった。

さて、どうするか？

あまり考えている時間もなかった。時間がたてば忍の目的は達成されてしまうのだ。

俺が足を止めていると忍は手裏剣を投げてくることはなかった。だが、彼女は今も手裏剣をしっかり構えている。少しでも動けば飛んでくるだろう。

「はあ、はあ、しょーくん、待ってよお。もう目覚まし止めないからさあ……」

その時半ば泣きながら息を切らせて明が坂を上ってくるのが見えた。忍は一瞬明のほうを見たが、すぐに意識を俺に戻す。忍も分かっているのだ。明の足ではもう間に

合わないということ。

「明も仲間ね」

も。忍の頭の中では俺も遅刻仲間になっているようだ。思惑通りにいったまるか。

「あ、しょーくん。待っててくれたの」

坂を上りきった所で明は俺の姿を見つけたようだ。顔をほころばせて俺のほうに駆け寄ってくる。

「別に待っていたわけじゃ……」

俺は言いかけて口をつぐんだ。妙案を思いついたのだ。

「明、ちょっと来てくれ」

俺は明を手招きして呼ぶ。忍は怪訝そうな顔をしたが、特に何もリアクションを起こさなかった。様子見といったところか。

明がほどよく近づいたところで、俺は空のカバンを忍の顔めがけて投げつけた。カバンはななくとも出席には関係ない。

同時に俺は忍に背を向け、学校の方を向く。

「甘いわよ、こんなもの目隠しにもならないわ！」

忍の声が聞こえた。たしかにそうだろう。俺もその程度で忍を凌げるとは思っていない。

ここで俺が走り出していたら、背中にブスリ刺さっていただろう。だから俺は走り出してはいなかった。

もう一度振り返ると、今まさに手裏剣を投げようとしている忍が見えた。

「明」

俺は明の手を取る。えっ、手を掴んだ瞬間、明が声をあげる。何でうれしそうな声をあげるんだ……。問いただきたい衝動がわきあがるが、今はそれを無視し、明を引き寄せる。ちょうど盾にするように。

「うひゃああ！」と忍。

「きゃあああ！」と明。

二人が悲鳴を上げたのも無理はない。忍の投げた手裏剣は俺の狙い通りに明の胸に刺さっていた。そりゃあ、もうブスリと。

それをみて明らかに忍はひるんでいた。大きな隙だ。

俺はその隙を見逃さず、学校へ走り出した。明はもちろんその場に捨て置く。ブスリいったのも巨大な詰め物に、だ。明本人は無傷だろう。

しかし、予想外に時間をくってしまった。腕時計を見る、余裕はないが、大丈夫だ。希望はある。

まだまだあきらめるのは早い。

俺は転げるようにして坂を駆け下りていった。

坂を自転車並みのスピードで駆け下りる。後ろからは明と忍が追ってきている。だが俺の方が速い。追いつかれはしない。

やがて坂の終わりにある交差点に近づく。第二のチェックポイント『魔の交差点』だ。こここの交差点の信号は長い。赤信号であったならば遅刻は免れないだろう。

ここばかりは運まかせだった。実力でどうにかできる問題ではない。祈るような気持ちで俺は坂を下りていく。信号は……

青。ただし点滅。

だが、まだぎりぎり間に合う。そう判断した。俺はためらわずに信号の点滅する交差点に突っ込んだ。

俺が横断歩道に差し掛かった時だった。

(！ 何だ！)

奇妙な感覚だった。背中あたりがゾクゾクするとでも表現すればいいのだろうか。

そんな感覚を味わった次の瞬間、俺は横断歩道に頭から突っ込んでいた。足が何か

に掴まれたように動かない。無様に転んでしまった。

「つつ！」

『魔の交差点』

魔の文字はだてではない。待ち時間が長いのが由来ではない。この交差点は『呼ばれる』ことで街一番有名なのだ。

ようは事故多発地帯だ。

それは、横断歩道脇のガードレールに無数に置かれる、花やお菓子などが雄弁に物語っている。

どうも俺は『呼ばれた』らしい。

足首を見るとしっかりと手形がついていた。まだ幼い少女のものと思われる手形だった。

更に目を凝らしてよく見てみると、うっすらと女の姿が見えてきた。

黒い髪、白い顔。

長く乱れ、体にまとわりつくような髪は、まるで蛇のようで不気味。まだ十分に幼さを残す顔はいたずらっ子のようにちきれんばかりの笑顔だった。

「ねえ、しょう。一緒に死なない？」

まるで昼飯を一緒に食べない？ と聞くような気軽さで幽霊は言った。ある意味おそろしい。

「間に合ってる。まだ死ぬ気はないと何度も言ってるだろ」

俺ははっきり言ってやった。正直俺が呼ばれたのはこれが初めてではない。よくあることだった。おかげでこの幽霊少女とも顔見知りだし、今ではちょっとした友人関係だ。ただ問題なのはこの幽霊は、俺にかなり過激ないたずらをするということだ。

この間も自転車で登校中に彼女に捕まり、あと一歩で逝く所だった。自転車はその時ダンプに巻き込まれ大破している。

「えー、いいじゃん。人間いつかは死ぬんだよ」

「だからって今死にたくはない」

「うーん」

幽霊少女がうなった。何か考えているようだ。その間も俺の足を離さず、同時に俺の体は金縛りにあったように動かない。……いや、ようなではなく金縛りか。

「でも、もう死にそうだよ」

少女が交差する道路の先を指した。でかいダンプがすごいスピードで走ってくる。俺の自転車を破壊して走り去った、悪質なダンプと同じやつだった。

……………。

いや、本当に死にそうじゃん、俺。

「マジかよ……」

思わず呻く。声は出るのに体は動かない。おとなしく遅刻していればこんな目には遭っていなかったらどうか？ 奇妙な後悔がふつふつと沸いてくる。

朝から手裏剣を投げられるは、幽霊に憑かれるは厄日としかいいようがない。

「う、ご、けえええ……」

気合を入れて体に命じる。逃げろ、と。だが体は一向に応えてはくれなかった。

ダンプはもう目の前だ。おまけにダンプ、スピードを緩める気配がない。殺す気か……。ひょっとしてここでの事故は全部こいつのひき逃げじゃないだろうな……。

「あっははー」

ダンプまであと数メートルというところで不意に金縛りが解けた。俺はその一瞬を逃さなかった。慌てて歩道に転がり込む。直後、ダンプは俺の後ろを走り抜けていく。危なかった。

幽霊少女は俺を見て、腹を抱えて笑っている。非常に腹が立つ。実体があれば泣くまで殴ってやるところだが、あいにくと幽霊だ。攻撃できない。

「くそっ、覚えてろよ」

なんだか三流悪役のセリフのようだったが、今の俺の気分を表すとそうなるのだ。

「信号無視しようとする、しょうが悪いんだよ。点滅信号はちゃんと止まりなさいよ」

幽霊は笑いながら言った。

点滅信号で渡ろうとして殺されたらたまったもんじゃない。

「また明日ねー」

くすくす、と笑い声を残しながら少女の姿が薄れていく。幽霊少女が完全に消えてなくなるまで、さして時間はかからなかった。

「くそ、おかげで遅刻じゃないか」

俺は押し殺した声で言った。目の前の信号は当然、赤。ここの信号は特に長いのだ。交通量はそう多いわけではないので信号無視ができなくはないのだが、幽霊少女に何をされるか分かったものではない。姿が見えなくなったからといって、いないと限らないのが幽霊の厄介なところだ。俺としては、できるだけ安全な時に渡りたい。

「しょーくん……」

後ろから声が聞こえた。振り返ると、明と忍の姿がそこにはあった。どちらも顔が蒼ざめている。手裏剣が刺さったり、刺したりしたのが相当きつかったらしい。

「あんた！ 何てことすんのよ！ 少しでもずれてたら刺さってたじゃない！」

俺を見るなり忍が吠えた。

「……そもそもお前が手裏剣を投げなければよかったんだろ」

「それとこれとは話が別よ！」

どう別なのか判断がつかないが、彼女は彼女で何かしらの判断基準があるのだろう。多分、一般人には理解できないものであろうが。

「あの胸パットすごい高かったんだから……しょーくんの馬鹿」

悲しそうな声で明が言う。

「じゃあ、これを機にオカマを止めろって。幼馴染として恥ずかしいことこの上ないぞ」

「うー」

信号は一向に変わる気配がなかった。忍はもとより、明も遅刻を覚悟しているようで、焦った様子もない。

「どうやらこれであんたも遅刻決定みたいね」

忍が嬉々とした口調で告げてくる。

たしかに、目の前の信号は赤。そして、その向こうには長くてつらい坂が控えている。一つ目の坂より長さも勾配もあり、厳しいものだ。間に合う可能性は無い。

だが、蜘蛛の糸ほどの希望は残っている。遅刻と認定されるのは、教師が出席を取るときに教室にいない者だ。そして、始業のチャイムから教師が教室に入るまで若干のタイムラグがある。その時間がいつもより長ければ、あるいは間に合うかもしれない。

もはや完全な運試しだった。

しかし、秘密兵器が残っている。秘密兵器で確実に一分弱の時間は稼ぐことができるはずだ。

だから、あきらめる気はなかった。

「まだまだ、何とかなるさ」

俺はじっと信号の変わるのを待ちながらつぶやいた。

走り出すのは、青に変わるのと同時だった。

体力の限界も考えず、全力疾走を開始する。幽霊の妨害はなかった。ただ、さっきまで金縛りにあっていた後遺症か、足に力がはいらぬ。

俺に並んで走るように忍の姿があった。それに少し遅れて、明。

「なんでお前らも走ってるんだよ」

てっきり二人ともあきらめたものだと思っていたので、二人の行動は意外だった。

「私はしょー……くんと、一緒に……いただけだよ」

息を切らせながら明が言う。男に言われると嫌な言葉だった。

「一生懸命走って、それでも遅刻するあんたの姿を見たいだけよ」

朗らかな微笑みで忍が言う。誰に言われても嫌な言葉だった。

「……………」

嫌がらせか？ この二人。本気でそう思う。

だが、今はこの二人に構っている余裕はなかった。急勾配の坂を全力で駆け上がる。

「はあ……はあ……」

さすがに厳しいものがあつた。坂を上りきった時にはすっかり息も上がっていた。明に至ってはもう目が虚ろだ。

ちょうど俺たちが校門を通り抜けた時、本鈴が鳴る。ロスタイムの突入だ。

「ふふん」

忍が勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。遅刻決定ね！ そういわんばかりの表情だ。体全体から喜びがあふれていた。

「こんにゃろ、見てろよ」

俺は忍を一瞥すると、構わず走り続ける。意地でも間に合わせたくなくなった。この登校の邪魔をしくさった馬鹿に一泡ふかせてやりたかった。

やがて、第三のチェックポイントが見えてきた。『下駄箱』だ。ただ靴を上履きに変えるだけの、あの下駄箱だ。

しかし、侮ってはいけない。靴を履き替えるために一度停止しなければならないし、履き替えるのも多少の手間はかかる。この時間、そのわずかな瞬間が生死を分けることを俺はよく知っていた。

運動靴のまま校舎に駆け込めたら、どれだけ救われることだろうか……。

「ふふん、どうする、靴を変えずに突っ込む？ 間に合うかもよ」

隣から挑戦的な忍の声。運動靴のまま教室に突入する。緊急回避の超荒業だ。それを使えばたしかに間に合う可能性があるかも知れない。ただ教師に見つかるの大目玉だ。おまけに無条件に呼び出した。ハイリスクな挑戦である。

「お前、それやったら絶対ばらすだろうが」

教師が足元に気づくかどうかは分からないが、それだけは確信が持てた。

「まあね」

「安心しろ、そんなことをする必要はない。俺には秘密兵器があるからな」

下駄箱攻略の秘密兵器。スピードを落とさず下駄箱を通過する手段を俺はあらかじめ用意していた。

「え？」

俺は無言で足元を指した。俺の足。そこにはあらかじめ上履きが装備されていた。

「な、なんで！」

「靴を変える時間が惜しいからだ。あらかじめ上履きで登校すれば、靴を履き替える必要がなくなるだろ」

これが俺の秘密兵器だった。第三のチェックポイントで何度も泣かされてきた俺が至った悟りだ。

「って、それじゃあ、上履きの意味がないでしょうがー」

忍の珍しく至極まっとうなツッコミが聞こえた。だがそれも徐々に小さくなる。彼女は下駄箱で足止めされているからだ。

最後に「ちくしょー、覚えてろー」などと三流悪役みたいなセリフが聞こえた。どっかで似たセリフを聞いた覚えがあるな……。気のせいかな？

俺は残り少ない体力を振り絞って階段を駆け上がり、廊下を突っ切り、教室に向かう。

時間としては本鈴から五分が経過していた。微妙な時間だ。担任がいるかもしれないし、いないかもしれない。

教室をのぞくと、中はまだざわついていた。担任の姿はない。

やった。間に合ったのだ。

「しょーく……ん、間に合ったんだね……」

すぐ後ろに明がいた。てっきりこいつも下駄箱で足止めされていると思ったが、そうではないようだ。よく足元を見てみると、靴のままだった。リスクを承知というよ

りは、むしろ靴を変えることに頭が回らなかったようだ。

今にも息絶えそうな呼吸で、ふらふらと歩いていく。そのまま机に倒れこみ、ピクリとも動かなくなる。

今となっては明のその様子を、余裕を持って眺めていられた。

だが、そこに違和感があった。何かがおかしかった。

「あ、れ……？」

小さな声が明から聞こえた。明も感じるがあったのだろう。

「ん？」

その直後に教師が入ってくる。担任ではなかった。その教師は俺たちを見ると怪訝そうな顔をした。場違いな物に難色を示すそんな雰囲気があった。

「……………」

「お前ら、三年だろ」

中年の男性教師は短くそれだけを告げた。

いやな予感がして周りを見回す。クラスメートがいなかった。そこにいたのは下級生だ。たぶん。何人か見た顔がいた。

……………。

ひょっとして……。

「そ、っか、今日から新学年だから教室の場所が違うんだ……私たち教室間違えたんだね」

明が親切にも状況を説明してくれた。

教室に笑い声が響く。

笑っていないのは遅刻が決定したオカマと馬鹿な男だけだった。

[戻る](#)